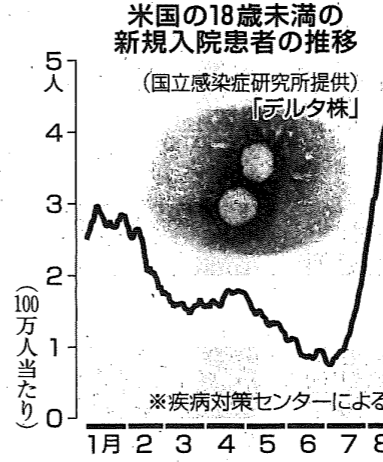


# 米小児科逼迫 覆る定説

## ワクチン対象外原因か

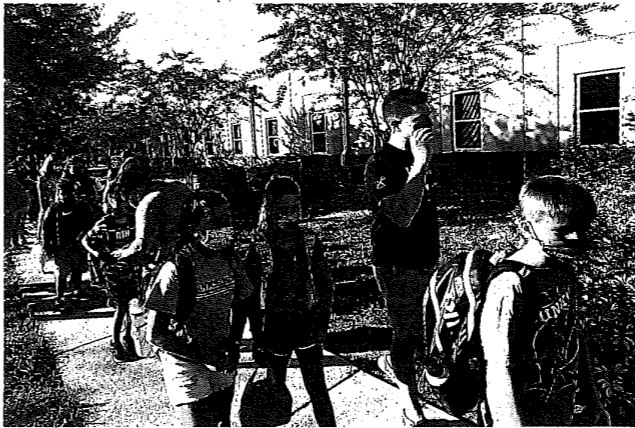
子どもは新型コロナウイルスに感染しにくいという定説が米国で覆されつつある。子どもの新規感染者数も入院者数も急増し、各地の小児科は病床が逼迫。感染力が強い変異株「デルタ株」が流行する中、12歳未満はワクチン接種の対象外であることが原因とみられ、9月までに始まる新学年を前に、バイデン政権は打つ手が限られている11面関連。

(ニューヨーク、ワシントン共同)  
山口弦一、仲井大祐



**表層**  
**深層**

米フロリダ州で、マスク姿で登校する小学生ら=10日 (ゲッティ=共同)



「1日10人以上の新型コロナウイルス患者を診て、一晩で子ども4人が入院した。これまでなかったことだ」。南部フロリダ州ハリウッドの小児科病室。女性医師がCBSテレビに「デルタ株を深刻に受け止めてほしい。信じられないほど感染力があり、子どもたちが苦しんでいる」と訴え、声を詰まらせた。

米小児科学会によると、今月12日までの1週間の子どもは新規感染者は約12万1千人(全年齢層の18%)で、6月下旬の週の14倍超に激増。18歳未満の新規入院者は最近、過去最多を更新し続けており、疾病対策センター(CDC)によると今月17日までの週で1日当たり平均307人だった。

重症例が増加中  
大半の子は無症状か軽症だが、重症例は着実に増えている。ニューヨーク・タイムズ紙は「子どもが感染しにくいことがわずかな光明だったが、変わりつつあるのかもしれない」と伝えた。

CDCによると、5月に全米の感染者の1.3%にすぎなかったデルタ株は今月14日時点で98.8%に達した。それと連動して感染も再拡大。ジョンズ・ホプキンス大によると、6月に2%前後だった全米の陽性率(7日間平均)は7月に急上昇し、今月19日で11.4%になった。

感染再拡大は、ワクチン接種率が低い南部州で顕著だ。接種率の低さが全米有数の南部ミシシッピ州は、19日時点の陽性率が42.7%。バイデン大統領は10日の記者会見で「子どもは多くの場合、未接種の大人から感染している」と述べ、子どもを守るためにも大人が接種するよう訴えた。

米国の小学校は8〜9月に新学年を迎えるが、米製薬大手ファイザーは5〜11歳に対するワクチンの緊急使用許可を9月末までに食品医薬品局(FDA)に申請する方針。接種可能になるのは「秋から冬」(米メディア)とされ、新学年の開始に間に合わない。

## 8月園だより コロナ感染症特集 25

**妊婦9カ所から受け入れられず**  
千葉の早産死亡

新型コロナウイルスに感染した妊婦29週、30代女性が入院できず、千葉県柏市の自宅に早産、赤ちゃんが死亡した問題で、千葉県は20日、早産した17日に少なくとも9カ所の医療機関に受け入れられなかったと明らかにした。

女性は11日に陽性と確認され1人で自宅療養。14日に中等症相当と認定され、15日から県と市が入院先の調整を始めたが、より症状の重い患者がいたため、受け入れ先は決まらなかった。

らかにした。5月にも感染した別の妊婦の入院調整が難航していたことも分かった。

女性は11日に陽性と確認され1人で自宅療養。14日に中等症相当と認定され、15日から県と市が入院先の調整を始めたが、より症状の重い患者がいたため、受け入れ先は決まらなかった。

R3. 8. 24  
花園保育園

王切開で出産した例も複数ある。「第5波」が押し寄せて最大の流行となった8月中旬からはほぼ毎日、妊婦の入院患者が出ているという。

県内では、軽症で妊娠36週未満なら、産科のある7病院が入院を受け入れる。36週以降は、分娩に対応ができる3病院が受け持つ。中等症と重症の妊婦向けは、36週未満は2病院ずつ、36週以降は1病院ずつある。当初、県立広島病院(広島市南区)だけが分娩に対応していたが、昨年12月、感染者の急増を受け拡充した。

入院が原則だが、事情があつて自宅療養を選ぶ妊婦も少なくない。この場合は、少しでも異常を感じればかかりつけの産科医に連絡するよう妊婦に伝えている。

## 妊婦の感染 体制整う

### 広島県 症状別に医療機関対応

新型コロナウイルスに感染して自宅療養中の千葉県産の妊婦が、入院先が見つからずに早産し、赤ちゃんが死亡したが、広島県内の妊婦への対応はどうなっているのか。

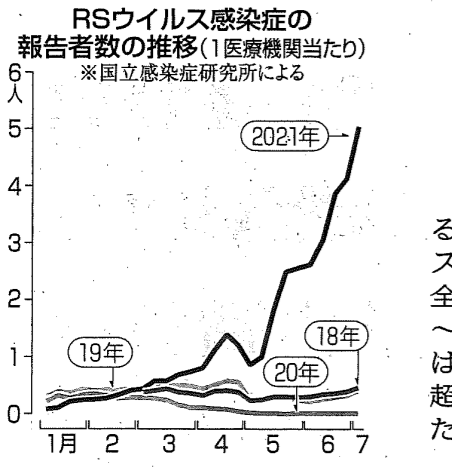
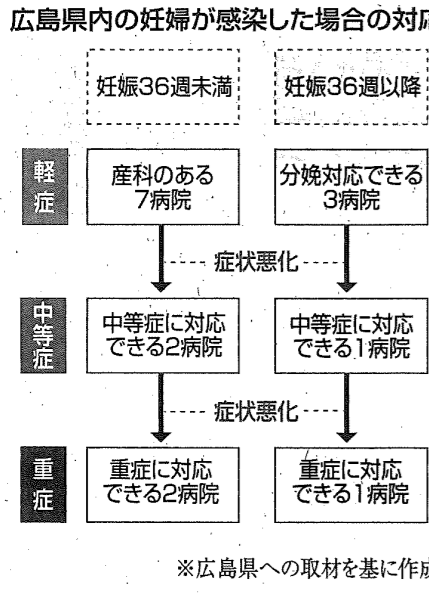
8月に入り、感染した妊婦の入院は増えていたが、県は「これまでは適切に対応できている。今後とも母子を守る体制を強化していく」としている。

県などによると、昨春から6月末までに感染が分かっていた妊婦は53人。大半はコロナの回復後に出産したが、入院中に赤ちゃんや医療者の感染を防ぐために帝王切開で出産した例も複数ある。「第5波」が押し寄せて最大の流行となった8月中旬からはほぼ毎日、妊婦の入院患者が出ているという。

県内では、軽症で妊娠36週未満なら、産科のある7病院が入院を受け入れる。36週以降は、分娩に対応ができる3病院が受け持つ。中等症と重症の妊婦向けは、36週未満は2病院ずつ、36週以降は1病院ずつある。当初、県立広島病院(広島市南区)だけが分娩に対応していたが、昨年12月、感染者の急増を受け拡充した。

**クリック**

デルタ株 新型コロナウイルスの変異株。昨年10月にインドで初めて確認された。従来株に比べて感染力が強く、重症化のリスクも高いとされる。感染や発症を防ぐワクチンの効果が低下するとの研究結果があり、接種を完了したのに感染「ブレイクスルー感染」が報告されている。世界保健機関(WHO)によると、少なくとも148カ国・地域に広がった。日本や欧米で主流化し、猛威を振るっている。



## RSウイルス感染症 国内外で猛威

### 乳幼児要注意 コロナ対策で免疫獲得に影響か

風邪のような症状で、乳幼児がかかると重症化することのあるRSウイルス感染症が今夏、猛威を振るっている。全国約3千の定点医療機関から7月5〜11日の1週間に報告された感染者数は1万5896人で、1機関当たり5人を超えた。現行の手法で統計を取り始めた2018年以降最多だ。

米国やフランスでも感染が急増。新

型コロナウイルス対策の徹底で、昨年のRSウイルス感染者数が減り、十分な免疫を獲得できなかった子どもが増えたのが原因という見方が濃厚だ。

専門家はインフルエンザなど昨年流行しなかった他の感染症についても、反動で今後流行が例年以上に拡大する可能性があるという指摘している。

RSウイルスに感染すると、鼻水や

せきなどの症状が出た後に回復することが多い。しかし乳幼児は細気管支炎から呼吸困難になって死亡することもあり、注意が必要だ。

しぶきやせきによる飛沫感染や、なめたおもちゃの共有など接触感染で、2歳までにほとんどの子どもが感染。その後も感染を繰り返すことで徐々に免疫がつき、感染しにくくなる。

東北大学のチームはこのほど、家庭内感染のほとんどが、最初の家族が感染してから1週間以内に起こり、まだ症状が出ていない段階からうつすケースが約3割に上ったとする研究成果を発表。5歳未満の感染リスクは5歳以上の3.5倍と高いことも突き止めた。

チームの押谷仁・東北大学教授(ウイルス学)は「子ども同士の接触が制限されたこともあり、今年の流行につながった」と指摘。重症で入院する乳幼児が増えているとして、家族に風邪症状があればすぐに病院で診断を受け、乳幼児にうつさない対策を取るよう呼び掛けている。

政府は、8月23日新型コロナウイルスワクチン接種で2回目を接種した人の割合が全国民の4割を超えたと発表しました。ただ4割に到達しても、足元では感染力の強いデルタ株が拡大している、収束の気配は見えない状況です。

都道府県別の接種データには職場で接種を受けた人の数が含まれていない為、実際の割合はさらに高くなるようです。

首相は2回目接種について、4割との目標を示していましたが、現状は8月末に国民の半数近くが、9月末には6割近くが完了するとの見通しを示しています。(二)